

『今物語』第五十一話

**Abstract**

まず、不老長寿。空を飛ぶこと。見えない筈のものが見える。蔭の聲がきこえる。他人の心のうちがわかる。食物に困らない。必要とあれば、鉢が飛んで行き、米俵がついて来る。酒が飲みたければ、滝が酒にかわる。土を掘れば、黄金がざくざくと出て来る。これらは不可能である。みんな人間のはかない願望がつくり出した説話だが、それでも次第に叶うようになって来ているものもある。長命になって来たのも事実だ。豊かになって来た。飛行機で空も翔べる。

放逸邪見と聽聞隨喜

だ。そうしたもののひとつに、

屁

がある。これくらい思い通りにならないものはない。なんとか自分の意志によってコントロールできないものか。

『古今著聞集』には、七条院に仕えて病的に放屁をする判官代があった。

同じ院に、へひりの判官代はうぐわんだいといふものありけり。後には宮内の大輔たいふになりて侍りしにや。をさなくより不便ふびんのものにおぼしめして、近くめしつかひけるが、へをひるより外ほかの事なかりけり。立つにもひり、ゐるにもひり、はたらく拍子わさごとにひりけり。態わざとせむとしもなかりけれども、病にてかく侍りけるとかや。上をはじめて皆ならひにければ、をかしみわらふ事もなかりけり。<sup>(1)</sup>

ある日参上した藤原孝道に、七条院は治療法を教えるようたのまれた。判官は、孝道にききにいった。「ぶしつけとは存じますが、実は」。「何事でございます」。

とばかりありて、「べちの事には候はず。へのいたくひられ候ふなり。立ちはたらくにしたがひて、すずろにひられ候へば、はれにてもえひかへ候はず。御所にてもつかうまつられ候へば、かつは便なきかたも候。いかがつかうまつり候ふべき」といひければ、孝道、心はやきものにて、はやく人にけささせられにけりと心得て、「よにやすき事に候。薬も候。やく所も候。それもうるさく候ふに、やすき療治には、御宿所にいでて、しばしこれを大事と、おもふさまにいきづみて、ひられんを期きにひらせ給へ。いつもいつもかくのみいきづみならひ候ひぬれば、おのづからはれにては、これは人まへぞかしとおもふ心候ひて、いきづみ候ふまじければ、ひられ候はぬぞ。内々にてよくよくい

きづまれ候ひて、ひりつくされ候ふべし」といひければ、「まことにやすき治療にこそ候ふなれ。すみやかにさして心み候ふべし」とて、やがてまかりいでて、教へつるがごとくにするに、いよいよならひになりて、ひりまさりければ、せんかたなくぞ侍りける。比興の療治のしやうなりかし。

孝道は、薬も、灸もありますが、簡単なのは、自宅へ帰って下腹に力を入れてこれ以上出ないというところまで、ありったけひりなさい、というのでさっそく退出して実行してみた。ところがそれからというもの、こんどは習慣になって、いままで以上に出るようになってしまった、という話である。

(五四二 七条院の屁ひりの判官代に、孝道療治の法を教示の事)

## 二

しかし、これを自在に行使した話もある。窮乏の果てに、道祖神という日本古来の神に祈願して、その術を得た。有名な『福富草紙絵巻』である。主人公秀武は、ただ思うように出るだけではなくて、それが、「綾つゝ、錦つゝ、黄金さらさら」という文句のついた妙音である。そのことが評判になり、やがて貴紳に知られ、その見事な芸を賞せられて褒美をもらい、以来裕福になった。一方隣りの夫婦福富は、それをまねたが大失敗を演じ、惨憺たる結果をまねく。この失敗した方が、福富なのは意外なようだが、主人公は失敗者の方で、これははじめから、あり得ない話だといっているかのようである。失敗者が、主人公になっている説話はほかにもある。

ただし、御伽草子の『福富草子物語』では、成功者が福富となり、そのまねをして失敗する男は乏少となっている。庶民の願望がまんざら夢想でなくなって来た時代のあらわれでもある。

こうした話の型は『竹取物語』の変形で、「竹伐爺」があり、これは竹を取りに入つてとがめられ、なにか特技があれば許すとあつて、

はい、日本一のへこき爺でござります。

そんなら一つこいて見い。

というわけで「屁」を行使することになり、認められてその後は自由に竹を伐ることが出来、栄えたという<sup>(3)</sup>。

まあ、それほど裕福になれないまでも、思い通りに抑制くらいは出来ないものか。それがなかなか無理だということ  
は、さきの『古今著聞集』の場合もそうだが、『宇治拾遺物語』にも藤大納言忠家の通っていた女が放屁した話がある。

今は昔、藤大納言忠家といひける人、いまだ殿上人におはしけるとき、美々しき色好みなりける女房ともの言ひ  
て、夜ふくるほどに、月は昼よりもあかりけるに、堪へかねて、御藤<sup>みす</sup>をうちかづきて、長押<sup>ながし</sup>の上にのぼりて、肩を  
かきて、引き寄せけるほどに、髪をふりかけて、「あなさまあし」と言ひて、くるめきけるほどに、いと高く鳴らし  
てけり。女房はいふにも堪へず、くたくたとして、寄り臥しにけり。<sup>(4)</sup>

こんな恥かしいことはないと思つめた。

この大納言、心憂きことにもあひぬるものかな、世にありても、何にかはせん、出家せんとて、御簾<sup>みす</sup>の裾をすこし  
かきあげて、ぬき足をして、疑ひなく出家せんと思ひて、二間ばかりは行くほどに、そもそも、その女房過<sup>あやま</sup>ちせんか  
らに、出家すべきやうやはあると思ふ心、またつきて、ただただと走りて、出でられにけり。女房はいかがなりけ  
ん、知らずとか。

しばらくしてから、さて、したのはどっちだ。なにも自分がしたわけではない。恥かしがるのはおかしいではないか。落着け、おちつけ。あわてて退出して出家しようと思いつめるのは粗忽であるにしても、気持ちにはわかる。そんな時、なんとかその場をとりつくるってやるのも方法だ。救いだ。『沙石集』巻六にはこんな話がある。

### (八) 説經師下風讃タル事

六角堂ノ焼失ノ時、彼勸進ノ爲ニ、日々ニ說法アリケリ。聖覺ノ說法セラレケル日、殊ニ聽衆ヲホカリケル中ニ、若キ女房、禮盤近ク居テ、眠リケルガ、堂ノ中モ響ホドニ、下風ヲシタリケルガ、香モ事ノ外ニ匂テ、興サメタル所ニ、導師是ヲ聞テ、「簫・笛・琴・箏・篳篥・琵琶・鐺・銅鈸、其音モタヘナリト云ドモ、香氣ヲ具セズ。多摩〔羅〕跋香・多伽羅香、其香カウバシト云ヘドモ、音聲ヲソナヘズ。今ノ御下風ニヨキテハ、聲モアリ、匂モアリ、聞ベシ、顛ベシト、申サレケレバ、餘リニ讃ラレテ、衣引ノケテ、「同クハ橘ノ氏ト申アゲサセ給ヘ」トゾ云ケル。讃惡キ事ヲモ被レ讃ケルニヤ。實ノ辨説ニコソ。女房メデ、橘氏トナノリケルニ、理リ候ヤ。サリナガラタヨリナキ供養物ニコソ。

嚴肅な法会場で御簾のなから音がしたので、さぞ困ったろうと、とりなすつもりで讃めあげた。あまり讃められたものだから調子にのって、それは私です、と名告り出たという話である。

そうかと思えば、同じ段に、今生の終りに思う存分屁をたれて死にたいと、そればかりを願いながら、ついに叶えられずに死んでしまったという話もある。

腹フクレテ、次第ニ大事ニナリ、日數ツモリテ、アブナク見ヘケレバ、隣ノ物訪ヒテ、「イカニ憑ナク見ヘ給コソ

淺間<sup>あきま</sup>シク侍<sup>おもふ</sup>レ。思事<sup>しじ</sup>モ云置<sup>いひ</sup>キ給<sup>たま</sup>へ。念佛<sup>なみふ</sup>バシモ申給<sup>まうし</sup>ヘカシ」ト云ニ、「イカサマニモ、此<sup>この</sup>飢渴<sup>きかく</sup>ニタスカルベシトモ覺<sup>ら</sup>ネバ、命<sup>いのち</sup>ノヲシキ事<sup>こと</sup>ハナシ。腹脹<sup>はつちやう</sup>テ、胸<sup>むね</sup>ヲセメテ、難<sup>がた</sup>堪<sup>え</sup>サニ、念佛<sup>なみふ</sup>ノ事<sup>こと</sup>モ覺<sup>ら</sup>ヘ侍<sup>おもふ</sup>ラズ。只<sup>ただ</sup>思事<sup>しじ</sup>トテハ、哀<sup>かな</sup>レ下風<sup>げふう</sup>ヲ一ツヒリテ死<sup>し</sup>ナバヤトコソ思<sup>おも</sup>ヘ」ト、最後<sup>さいご</sup>ノ詞<sup>こと</sup>ニ申<sup>まうし</sup>テゾ息絶<sup>いきた</sup>ニケル。飢渴<sup>きかく</sup>ニセメラレテ、食<sup>じき</sup>ヲノミ思<sup>おも</sup>テ死<sup>し</sup>バ、餓鬼<sup>がき</sup>道<sup>だう</sup>ニヤ落<sup>お</sup>ベカリケン。但<sup>ただし</sup>、最後<sup>さいご</sup>ノ念<sup>ねん</sup>ノツヨキニヒカレテ、感ズル事<sup>こと</sup>ナレバ、畜生<sup>ちくじやう</sup>道<sup>だう</sup>ニゾ落<sup>お</sup>テ、下風<sup>げふう</sup>ヒリ蟲<sup>むし</sup>ニヤナリケムコソ覺<sup>ら</sup>ヘ侍<sup>おもふ</sup>レ。

無住<sup>むじゆ</sup>は、最後の執念<sup>しつねん</sup>がこつて、たぶん畜生<sup>ちくじやう</sup>道<sup>だう</sup>に落ちるだろう。すれば「下風<sup>げふう</sup>ヒリ虫<sup>むし</sup>」に生まれかわるだろうといっている。これは笑えない話である。屁<sup>へ</sup>は思い通りにならないものだが、屁<sup>へ</sup>のようなことでも思い通りに出来なかつた苦しい庶民<sup>しよみん</sup>に同情<sup>どうじやう</sup>して、せめて六角堂<sup>かくかくだう</sup>の女房<sup>にようばう</sup>や、略<sup>りやく</sup>した話<sup>わ</sup>のなかにあるのだが、迎講<sup>むぎかう</sup>で屁<sup>へ</sup>をした観音<sup>くわんおん</sup>にでも生れ替<sup>か</sup>ればといっている。

## 三

『今物語』は軽妙な説話集である。承久<sup>じやうきう</sup>の乱<sup>らん</sup>のあと、世<sup>よ</sup>の推移<sup>すいし</sup>を見つめながら、しかもそれを深刻<sup>しんこく</sup>にならず、達観<sup>たつかん</sup>しながらまとめたものである。一方では当代<sup>たいだい</sup>でも知られた歌人<sup>かじん</sup>の一人でありながら、そうした名譽<sup>めいよ</sup>に恬淡<sup>てんたん</sup>とし、一方似絵<sup>にえ</sup>の名手<sup>なて</sup>と称<sup>なづ</sup>され、洒脱<sup>しやだつ</sup>に清貧<sup>しやうひん</sup>な人生<sup>じんせい</sup>を送<sup>おく</sup>つたものと思<sup>おも</sup>われる。

そうした藤原<sup>ふじわら</sup>信実<sup>のぶみ</sup>の、円熟<sup>えんじよく</sup>期の「軽み」を出した当代説話集ともいふべきものが『今物語』で、人生<sup>じんせい</sup>の哀歎<sup>あいたん</sup>を染<sup>そ</sup>ませながら、そこに懐かしい人間性<sup>じんがうせい</sup>が感じられる。軽いタッチで「今」をとらえているのが、信実<sup>のぶみ</sup>の面目<sup>めいもく</sup>である。

その第五十一話も、女の「屁」をとりなした話である。

しかるべき所に仏供養しけるに、堂のかざりよりはじめて、えもいぬ聴聞のつぼねのきちやうのうちに、そらだきの香みちて、いみじかりけるに、聴聞の人の、おほくあつまりて、耳をすましたるに、うちよりおびたくおほきなるへのおと、いできにけり。みな人興さめて待るに、導師とりもあへず、「放逸邪見の里には、ついわをもをしむ、聴聞随喜の局より、おほへをこそうちいだされたれ」といひたりける、あさましくもをかしくもありけり。<sup>(6)</sup>

聴聞所には空薫きなどしてあつて雰囲気が出ている。これから仏供養の功德について、有難い説法がはじまる、と期待で緊張がみなぎったところで、大きな音がしたのである。興ざめはもちろんだが、ここで導師が、その場をつくろうように、「不信心のひねくれ者は、『ついくわ』すら惜しみますが、こうした信仰心のあつい皆様のなかからは、大音の屁まで御布施にさし出してくれます」とやった。興言利口である。「あさましくもをかしくも」というのは、道場内全体であり導師のいったことに対してもであらう。

ここでもうすこしいっておくと、道場内の出来ごとは、「あさまし」でありながら、当意即妙な導師の表白は「をかし」であったといえるであらう。この話に類似したというべきか、先蹤というべきかという笑い話が、さきほどの『沙石集』の六角堂勧進の聖覚の説法である。失敗した女房はだまっていればよいものを、あまりほめられたために、「五月待つ花橘の香をかげば」で、香のよいのは橘だから、讃められて、思わず名告り出たわけである。これはいかに聖覚の説法が、聴衆をそらさず、雰囲気にひき込んでいたかを物語る笑話でもある。もっとも橘の香だから、御仏に捧げてください、とまでいわれると、たしかに「タヨリナキ供養物」ではある。

さて、そうはいうものの『今物語』の、「ついくわ」がわからない。引用底本文補注には、次のようにある。「放逸邪見の里には……」からの注である。左に掲げる。

場ちがいな放屁を強いて法話にしたてているところにおかしさがある。「放逸邪見の里」と「聴聞隨喜の局」、「つくわ」と「おほへ」がそれぞれ対句。「放逸」は仏語。梵語 *prama* の訳。悪を防護し、諸善を修めず、かつてきままで、自制する所のない心の働き。「成唯識論 六」他にみえる。「邪見」は仏語。梵語 *mithyadrst* の訳。邪曲な見解の一つ。五見、十惡、十隋眠の一つ。善惡因果の理法を無視するよこしまなひがんだ考え方をいう。「俱舍論 十九」「成唯識論 六」にみえる。「里」は、「寺」に対して、俗世間、世俗の意。「つくわ」は「つい貨」、ごくわずかなたからの意である。「隨喜」は、喜んで仏に歸依すること、心からありがたく思うこと。「おほへ」は「大屁」。

導師の表白のとらえ方として、ここが対句になっていると見るのは従うべきであろう。またすでに、増淵典子氏の言及もある。その「補注」として、

導師のことば中の「つくわ」の意味ははっきりしないが、「つい過(禍)か」か。少々のあやまち(失礼)という意味である。「つくわをも惜しむ」は、そういう過ちをしないように(放屁を)惜しんでの意であろう。

聴衆の突然の失態を即座に処理した僧侶の機転を、「あさましくもをかしくもあり」と評するが、そこには「大鏡」「雑々物語」の清範律師が犬のための法事の折、「只今や過去聖靈は、蓮台の上にて、『ひよ』と吠え給ふらむ」と講じて、聴衆をうならせた趣に通ずるものがある。清範律師の名講説も世継の翁から「をかしくこそ候ひしか」と評されて<sup>(7)</sup>いる。

いずれにしても難解というべきところだがこれらはそれぞれ、示唆をうけるところではある。ところで私は、このあたりについて一考を得たので、そのことを述べてみたいと思う。



となつてゐる本文は、「御所本」（宮内庁書陵部本、さきに引用して来た底本となつたもの）、その他の写本および「天明本」、「群書類従本」などの刊本でも大体おなじ書体である。いま便宜「群書類従本」本文によって、その個所を示す。

何れよりく辱をすむくはなれぬわが心あり  
むかしはかたがたの言出さじにきり皆人真きめて侍も守  
師よりとあへ次放逸難免なり果ははらふとぞとお  
ひ腫國路表の病よりおちへをこそうらめされしとぞと  
ひひありもろあは師くそおうくそ有らるる

徳本帳乃由に空たき乃香みちへいみ  
 しくりけふに聴ゆの人衆多く集りて  
 耳紙種しくする舟内よりおひたしく  
 おなれふ御辱乃音出来ふけ里皆人真  
 怖あく侍るは導師取もけへん  
 教逸邪又お里にハ墜瓦をも惜む聴聞  
 随喜満局ぐり大屍成ころ打出れれ  
 れと言たり爺お沙面鋪をたうしくも  
 うけり

—宮内庁書陵部所蔵 木活字版—

法

である。上記の本文は大体系統が同じであるとみられるが、ここに、まったく別系統かと思われる本文がある、

それは、「文化十年」の木活字本である。これも上に掲げる。

木活字本は、静嘉堂文庫蔵本、宮内庁書陵部蔵本、同じであるが、問題の「ついくわ」に相当するところは、「墜尾」であり、「おほへ」にあたるところは「大屁」である。そして「墜尾」の「尾」はおそらく「屁」の誤写であらう。

さきにあげた『宇治拾遺物語』三四に、「藤大納言忠家もの言ふ女、放屁の事」があつたが、これが、古活

字版、伊達本、陽明文庫本、御所本等、いわゆる古本系統諸本は、みな、

藤大納言忠家物言女放尾事

となっている。<sup>(8)</sup>「屁」は「尾」と誤りやすいことかくのごとくである。

ところで、「墜屁」という言葉も知られていない。だが意味はわかる。「屁を落とす」ことで、「ケチなやつは、屁もひっかけない」といったところだろう。

文化十年木活字本が、果たしてどんな本をもとにしているか明らかでないが、この「ついくわ」という本文が、圧倒的（おそらく他はみなそうであろう）に多いなかで、このように大胆に漢字を当てたところは、それなりの根拠があり、判断があたりものである。

それでは、「ついくわ」と「墜屁」のあいだには関係がないのだろうか。さきの字体をもういちどよく見なおしてみると、「くわ」は、「屁」の、あるいは「尾」の略体のさらに意味が分らないままくずれて行った形であったと思う。

だが、導師が、なぜ「ついい屁」といい、「おほ屁」といったか。これらは仏教語と懸けてあるのではないか。そうだとすると、「墜屁」は、「追責」に懸けられているであろう。「追責」は先祖供養のことである。『日本国語大辞典』その項には次のようにある。

ついいひ 【追責】 【名】（「責」は飾るの意）死者の供養をして、その功德を飾ること、追善。・太平記三九・法皇御葬礼事「十方の諸仏も明に此追責（ツイヒ）を随喜し給ひ」・高野山文書一応永六年四月日・前左馬頭源朝臣諷誦文写（大日本古文書五・六九五）「泣修<sub>ニ</sub>追責<sub>ニ</sub>（ヒ）奉<sub>レ</sub>祈<sub>ニ</sub>正覺<sub>ニ</sub>」

そして、果たして「墜屁」が「追責」にかけられているとすると、「大屁」も「おほへ」とよまらるべきではなく、「だい

ひ」でなければなるまい。すなわち「大悲」なのである。「大悲」についていまさら詳しくいうまでもないかも知れないが、いま中村元他編『岩波仏教辞典』によって、その意味と用法を示す。

大悲　だいひ〔梵文略〕仏の、衆生に対するいつくしみ。大智、すなわち悟り（自覚、自利）をあらしめる智慧に對し、衆生済度（覺他、利他）をあらしめる原動力。仏に特有な十八の徳性の一つ。大乘仏教は特に仏の慈悲を強調するが、さらに菩薩にも不可欠の徳と考える。たとえば觀自在菩薩（觀音）は（大悲を有するもの）とよばれる（大悲陀羅尼經）。さらに、菩薩は他者に代つてその苦を引き受けるとされ（大悲代受苦）、また、大悲をもって衆生を済度するため涅槃に入らないとして（大悲闡提<sup>せんたい</sup>）ともよばれた（楞伽經）。

なおこの「大悲」は、「觀音」の別名でもあったから、この『今物語』の仏供養というのは、觀音像造立供養であったかも知れない。

ともあれ、要するに「大慈」が衆生への大きないつくしみであるならば、それに対する「大悲」は大きな思いやりである。すると、この段の、「放逸邪見の……」は、

不信心のひねくれ者は、ろくな先祖供養もしないが、こうして私の説法を聴いて信心をおこしたものは、さっそくおなさけ（御布施）をしてくださったことだ。

と、いうことになる。

「放逸邪見」の者で思いあわせるのは、『宇治拾遺物語』の「くうすけ」のような奴である。この者は、仏供養はするの

たが、仏師をおどし、導師には期待をもたせただけでなんの御布施もしない。だがあまり布施をとりあげる僧侶が多くなつたので、反動としてこの説話も出て来たのだったろう。

さて該当部分にもどって、もうすこしつけ加えるが、「放逸」には「放屁」が利かせてあり、「聴聞」にも音を聞くはもちろん、臭いをかぐの意がすでに利かせてあったと思われる。「うちいだしたり」にも、いい出す意に、女房の高音の放屁はもちろん、御簾から袖口を出すこと、さらには布施を出すことが、懸けてあると思われる。

いずれにしてもなかなかよく出来た笑語であり、僧侶の物欲がちらついているのもおもしろい。

信実は、いろいろな意味をこめて、「あさましくもをかしくもありけり」といったのであろう。

#### 四

私は、本稿で、中世説話文学『今物語』の一説話の語句の解明を手がかりとして、ほとんどかえりみられることのなかった、もっとも新らしいかに思われる近世末期の、文化十年（文化十四稔十月輪台蔵）の木活字本が、従来尊重されていた写本や版本に比べて、もっとも優れているのではないか、と思うに至った。

いったい文献学的にいうと古いものがよい。古いことは、それだけ原作の面影を遺していると考えられるからだ。そして大概においてその推測は確かである。が古いばかりが能ではない。新しい伝本にも、古態が残存し原作の面影を髣髴とさせるものもある。そのもっとも有名な一例はいうまでもなく、紀貫之の『土佐日記』の本文である。もちろん原作は失なわれているが、その忠実な写本のまた忠実な写本として、書写年代は近世の青谿書屋本『土左日記』があるのは、学界周知である。<sup>(9)</sup>この説は、近年、原本からの忠実な写本である旧冷泉家本（現大阪青山短期大学蔵）が発見されたことにより、まことに見事に裏付けられたことも周知するところである。もっともこれはむしろ類い稀な文献学上の快挙であり、あるいは奇蹟とすらいってもよいほどの成功であって、万事このように行くということは考えられないが、さりとて古いものを

尊重するあまり、新らしいものを軽視するのであったら、現在、繰り返しくりかえし刊行されつづける古典のテキストの類も大方意味のないものになってしまうだろう。

私がいいたいのは、それがたとえ新しいテキストであっても、古態をとどめた、あるいは原作の面影をつたえたものがあるだろうという、いわば常識的なことを、ここでいっておきたいのである。

『今物語』の伝本は、先学によると二十数本があり、一応の調査はされているが、まだ未見のものもある由で、まだ校本を作るといふには至っていない。しかし、おそらく代表的な本文として宮内庁書陵部の「書陵部本」というのがあげられ、三弥井書店版の注釈書には、この本文が底本として使われている。そして諸本は次のようにまとめられる。

版本からの写と思われるものを除いてゆくと、今物語の写本はさほど多くない系統を残すだけのようである。内閣本（右掲2）と彰考本（21）、静嘉本（4）と松平本（19）、それに鶴舞本（20）と神宮本（24）とは、それぞれ底本を同じくするか、転写関係にあるものと考えられる。さらに鶴舞本・神宮本・内閣本・彰考本・京大本は第三六話にかけてほぼ一丁分の欠脱があり、同系統に属する本文として扱ってよいであろう。書陵部本・静嘉本・松平本は、第四九話中の「別れしを」の歌の四句目に脱落があつて、この点は内閣本・彰考本も同様であり、溯れば底本は同一なのかも知れない。しかしどの本にもそれぞれに誤写・脱字が少しずつ存する。

天明六年版は、刊記によると村井古巖蔵本を底本とし、横田茂悟本・屋代弘賢本によって校合したというが、村井古巖蔵本は現存の神宮本、屋代弘賢本は静嘉本であろうと考えられる。群書類従本は天明六年版の本文作りと同じ方法によつたらしいが、天明六年版と全く同一ではない。なお新校群書類従は、さらに内閣本を以てこれに校合を加えている。（カッコ内の数字は同書中の書誌的解題の番号を示している）

と。しかし、私は、これに加えて文化十年版本の優秀性を、現段階では主張したいと思う。

木活字本であるから組版の上で明らかに行を組みまちがえたところもあるが、「ついくわ」が、「墜尾」となって「尾」が「屁」の誤りから来たことがわかり、それによって「くわ」が「屁」の草体のくずし方から誤って行ったものと推測がつくなど、よい本文から来ていることがわかる。いずれ諸本の校合が望ましいが、木活字本の特長をいくつか示しておきたい。見出し頁数は、三弥井書店版によって示したが、本文はその底本である宮内庁書陵部本そのままに従い、下に木活字版本文をおいて比較した。

〔三 朧月夜〕 一二四頁

このおほろ月はいかしくへき——このおほろ月はいかかしさふらふへき

〔六 うしろむき〕 一二六頁

ならぬはかりぞ——ならふ計そ

〔一二 あしで書き〕 一三二頁

やかてそのあしてのうへて——頓て其あし手の上に

〔二四 沓の千鳥〕 一三三頁

しはし御くつをはきたまひて——しはし御くつをはき給はて

〔四四 鳩吹く風〕 一六〇頁

はとふく秋とこそおもひまいらせすれ——はとふく秋とこそ思まいらせ

〔四五 春の殿守〕 一六二頁

物おもふ春のこのもり——物思ふ春のこのもり

など、大体当木活字本が、他の諸本と一致するようであり、正しい本文と見てよいと思う<sup>(10)</sup>。

〔六〕の「ならぬ」の「ぬ」は、現行の字体と同様だが、木活字本では「婦」の草体で「ぬ」に似ており、誤写の過程がわかる。

注

- (1) 西尾光一・小林保治『古今著聞集』下(新潮日本古典集成)本文による。以下同じ。
- (2) 増古和子「癪取り譚」の生成と本質——『宇治拾遺物語』第三話を中心に——(『古典遺産』一九八八・一二)。
- (3) 柳田国男『昔話と文学』『竹伐爺』(『定本柳田国男集』第六卷所収)による。
- (4) 大島建彦『宇治拾遺物語』(新潮日本古典集成)による。以下同じ。
- (5) 渡辺綱也『沙石集』(日本古典文学大系)による。以下同じ。
- (6) 久保田・大島・藤原・松尾校注『今物語・隆房集・東斎随筆』(『中世の文学、三弥井書店刊、昭和五十四年五月)による。以下、補注も同じ。
- (7) 増淵典子「現代語訳『今物語』(5)〔並木の里〕第十一号、一九七五年(昭和五〇)十一月。
- (8) 吉田幸一編著『宇治大納言物語 伊達本 下』(私家版「古典聚英3」)(『古典文庫、昭和六〇年三月刊)。
- (9) 池田亀鑑『古典の批判的処置に関する研究』(岩波書店 昭和十六年二月刊)。
- (10) 私の対象とした本文は、写本では、三弥井書店版の底本となった宮内庁書陵部本、同八洲文藻本二種、静嘉堂文庫本、岡山大学池田文庫土肥本、同大歌書本、刊本では天明六年版、文化十年版、群書類従版などである。